

熊田禎宣教授：人と学問

政策情報学部長・教授 宮崎 緑

政策情報学部の学問的支柱でもあり、精神的基盤でもあった熊田禎宣教授は、政策情報学、社会工学を核とした都市・地域・環境・リスク・計画分野及び経済政策分野における第一人者であり、日本学術会議会員として経済政策分野、地球環境分野の委員長を務めるなど、日本の学術の振興・発展に無くてはならない存在だった。国際的な研究者のネットワークでもキーパーソンで、MIT、ハーバード大学、ベルリン工科大学等の研究チームと共同研究も行い、ベルリンの壁崩壊に際しては、東西ドイツ統一後の都市モデルの提案も行った。国内では、都市システムシミュレーションを用いた筑波の学園都市の設計にも携わった。

29歳で東京工業大学助教授に就任し、東京工業大学のホープといわれた。フォード財団によるバークレーでの外留後、国連就職を断って、新進気鋭の都市システムの研究者として東工大に奉職したもので、社会工学科及び大学院社会理工学研究科の創設にも中心になって活躍した。学会での重鎮ぶりは、役職を連ねるまでもなく明らかだが、ちなみに日本環境共生学会、日本計画行政学会、日本地域学会、日本不動産学会、日本資産評価学会、日本シミュレーション&ゲーミング学会、日本社会情報学会、都市住宅学会、日本都市計画学会等の会長、International Society of City and Regional Planners (ISOCARP)、Asian Real Estate Society など多くの国際学会の役員や日本代表を務めた。日本都市計画学会の「石川賞」、日本都市計画学会賞、日本社会情報学会「優秀論文賞」、日本地域学会や日本不動産学会の「著作賞」なども受賞している。

この豊かな学術・教養と新学科設立のノウハウを惜しみなく注ぎ込んで、政策情報学部の創設に情熱を傾けたのである。時に、高尚な思考は現実を超越してシュールでさえあることもあったが、口癖だった「教育があっても教養の無い人材は無用だ」に象徴される政策情報学的行動様式を貫いた学者だった。

その熊田教授が急逝されたのは2009年5月13日だった。

朝9時40分頃、研究室に「11時頃出校する」という電話があったのが、大学関係者の聞いた最後の声だった。11時になってもいらっしゃらなかったが、秘書氏は当初、特段異常を感じなかったそうだ。そのくらい、電話の声はいつも通りだったのだろう。ところが、午後1時の会議が始まってから大学に姿を現さなかった。連絡もなく欠席するような教授ではない。秘書氏はこの段階で胸騒ぎを感じたという。お住まいが大学の近くだったので、秘書氏は訪ねていった。携帯を鳴らしてみると、部屋の中で鳴っているのがかすかに聞こえるのに、先生はお出にならない。ここから大騒ぎになった。おひとり暮らしだったため、警察の立会いの下で、倒れている先生が発見された。着替えようと筆筒をあけているようなポーズだったという。

心臓発作だった。

もし、大学構内に一步でも入ってから倒れられたのなら、助かったかもしれない。もし、大学に出る時間帯が違ったら無事だったかもしれない・・・ 無念の思いを断ち切ることはできない。

今、政策情報学部は創設10年の時を経て、時代の激動の中で version2.0 へのバージョンアップに取り組んでいる。この時に熊田先生を失った損失はあまりにも大きい。思えば、学部が10年目の区切りを迎えようとした矢先に忽然と姿を消されたのであり、それはまさに、ポスト草創期への移行を身をもって示されたかの如き啓示とでもいえる衝撃を私たちに与えたのだった。

今となっては、つたないながら御遺志を継いで学部の発展と学問の一層の精進を目指すのが供養かと気を引き締める他ない。ご冥福を心よりお祈りし、追悼号を捧げるものである。